

総 務 常 任 委 員 会 記 録

令和6年2月16日（金）午前9時58分～午前11時01分（9階903会議室）

○出席委員（8名）

委 員 長	鈴木 正実
副委員長	山田 裕
委 員	浦野洋太郎
委 員	丹治 誠
委 員	菅原美智子
委 員	二階堂武文
委 員	高木 克尚
委 員	渡辺 敏彦

○欠席委員（なし）

○案 件

- 1 行政視察の意見開陳について
- 2 今後の調査の進め方について
- 3 その他

午前9時58分 開 議

（鈴木正実委員長）それでは、次第に従いまして進めたいと思います。

まず、最初は行政視察の意見開陳についてであります。

議題等はお手元の配付のとおりでありますので、その（1）についてスタートしていきたいと思えます。

1月29日から30日の2日間にかけて、相模原市及び横須賀市への視察を行いました。それぞれの市における生成AIに係る取組について聴取してまいりました。本日は、その行政視察で聴取した各市の取組について、それぞれの自治体ごとに意見開陳を行いたいと思えます。

初めに、相模原市の視察に関する意見開陳を行いたいと思えます。

意見開陳は、順番に全員の方の意見をお聞きしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、意見開陳を始めたいと思えます。まずは、相模原市についての意見開陳を行いたいと思えますので、渡辺委員のほうから順次回っていききたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

（渡辺敏彦委員）まずは、今回事務局で作っていただいた資料見ましたら、大分俺はなまっているな

と。ということで、文章とか文書作りについては非常に有効なことだなということは感じてまいりました。最終的に何を目標にするのかという部分についてはまだ見えていない部分があったのかなということで感じてきましたので、横須賀のほうもありますけれども、これを導入するにあたってはやはりそこら辺の目標というのをしっかりしながらやっていかないと、何のためにやっているのか分からなくなってしまうのではないかなというようなことを感じたところであります。

（浦野洋太郎委員） 皆さん視察お疲れさまでした。相模原市についてということで、横須賀市と比較すると、相模原市さんはNECさんとの共同での検証ということで、まだ今その段階だということを強くおっしゃっていたので、今後もその結果をこれからも注視していかないといけないなというふうには思いました。チャットGPTは、今4ですけれども、これからも5、6、7といずれ進んでいくことになると思うので、日々アップデートされている生成AIですので、今後も継続的な調査ということが必要不可欠になるのであろうなというのは話を聞いてよく感じました。その上で課題として挙げられる、相模原市さんの中でお話なんかもありましたけれども、プロンプトをした回答が大学生レベルであったり、内容によっては中学生レベルの回答がまだあるというふうに、相模原市の市長さんもそういったお答えをされているということでおっしゃっていましたので、質問力、プロンプト力ということを高める研修等も、それは横須賀市さんと重なりますけれども、そういったことも市民、当局の職員さんの必要性はあるのだらうなというのは感じました。自分としても積極的に将来的には取り入れる上で、かつ慎重な議論というのはまた必要なのであろうなと感じました。

以上です。

（高木克尚委員） 福島市として導入していく方向には変更はないのでしょうかけれども、相模原市の実態のイメージ的に思うところは、将来福島市が汎用性の高いそういうシステムを導入していくのか、相模原市さんのように、あるいは民間事業所と共同研究、共同開発なんかしながら福島市独自のシステムを目指すのか、その辺は、先ほど渡辺委員がおっしゃったように、何を目的にという着地点が何となくイメージが湧かないので、費用がかかるものなのか、あるいは世間一般に汎用性の高いものを導入して費用を抑えていくのか、その辺の方向性あるいは着地点というのがなかなか見えづかったなという思いがしてきました。要は福島市がどんな目的を持ってどういう方向性に進むのかということをもう少し掘り下げていかないと、当委員会としての結論の導き方もちょっと変わってくるかなって気がする。そんな思い、心配をしました。

以上です。

（丹治 誠委員） 相模原市は、実証実験サポーターという職員が何人かいたということで、共通して皆さんが言っているのは使える範囲が広いという、そういう感想があって、様々エクセルなんか誰がつくったか分からないやつ直したりとか、パイソンでもプログラムをつくれるとか、いろいろすごく使える範囲が広い。アイデア出しなんかもばんばん気づかないところでいろんなものの気づきを与えてくれるみたいな話をされていて、使ってはいる感じ。ただし、先ほど話出しましたけれども、プロン

プトをしっかりしないときっちりできないということで、そういう感想を持っていると。そういう中で、NECと共同開発するところが相模原市さんで一番肝になったのが、国産の生成AIを使って、行政事務とか日本語に特化したものがあつたほうが使いやすいのだろうなということでやっていて、そこが相模原市さんの一番肝なのかなというふうに思いました。全体的にまだまだ開発はやり始まったばかりで、試行錯誤しながらやっているという印象で、走りながらいいものを見つけていっているという段階なのだろうなという感想です。

以上です。

（菅原美智子委員）視察で大変お世話になりました、ありがとうございます。先進的事例ということで視察させていただきました2市なのですけれども、まず相模原市のほうは模索中であるということに非常にびっくりいたしました。もっと市政の中に溶け込んでいるかと思ったら、まずAI自体にどういうふうに学習させるかという段階ということ、それから企業と一緒に開発途中であるということで、まだまだ模索するところがたくさんある、課題がたくさんあるというところをお聞きいたしました。まず、行政用語などをどう学習させていくのかということです。それから、日本語の揺らぎをどういうふうに学習させていくのか、こういったところは企業と本当に密になりながら検討していく課題というのは大きいのだなということを感じました。職員の方のアンケートも見ましたが、実施した職員の中では8割の方が必要であろうという、職員が不足していく中で必要と考える職員がある中で、やはりAIを使っていく、情報漏えいであるとか、あるいはコンプライアンスをどういうふうに職員に位置づけさせるのかというところも課題になっているのかなというふうに思いました。いわゆるガイドラインの検討が非常に難しいのだなということも感じましたし、それを福島市に導入する際に、では一体どういうふうに検討していくのかというのを感じました。本当に実践しているかと思ったら、やりながら進行中であるというところを感じました。2日目の視察と非常に相反するところを見させていただきましたので、勉強になりました。先輩方がおっしゃるように、今後福島市に導入する際にやはりいろいろな課題があるのだなということも勉強させていただきました。ありがとうございます。

（二階堂武文委員）私も、今般書記のほうで当日のやり取りを文字化していただいている、改めて考え方の整理ができましたので、それに基づいて二、三点ちょっとお話ししたいと思うのですが、まず1点は、各委員の皆様からも出ておりましたが、やはり一般のマスコミ報道がすごくセンセーショナルに報道された。ですが、現実には昨年10月の段階で国産の生成AIということで、NECさんと生成AIを使い始めるというような発表でしたが、もう導入されて使っているものというような形で受け止められたというところで、すごくセンセーショナルな取り上げ方からのスタートというところでした。それは、やっぱり先ほど来ありましたが、命令を出す中に既に学習している内容が英語圏の情報が六、七割ぐらいということもあって、日本語での問いかけに対する反応が、どうしても問いかけ方とか何かによって本当に中学生レベルから大学生レベルぐらいの答えが返ってくるという、問いかけ

方によって大分差があるということは、やはり日本語の情報の蓄積というのがあれば違う、またそこも変わっていくだろうという捉え方で、日本語をうまく使い分けている日本の企業のNECと、そこはNECさんもお自身ですごく得意だと言っているから、一緒にやってみようという判断に至ったというようなお話をスタートのところで紹介をされていたのがまず1つ印象的でした。

もう一点、丹治委員の質問に対してDX推進課長さんがお答えされていましたが、もしかしたらですけれども、ロゴチャットをどんどん使っていこうという点、NECのやっぱりいろいろやったけれども、理想論でそんなところに行かなかったねというようなことになり得るかもしれないのですが、ならないように頑張っていきますという、先が読めないところに対するそういったお考えも入れながら今やはり現場で作業されているのだなというのを改めて感じました。そういった中で1点すごく印象に残ったのは、比喻を使われていました。どういった比喻かという、生成AIは細身の刺身包丁、これだけでは御飯が作れないのでと、生成AIを刺身包丁に例えた表現で言っていました。その中の刺身包丁だけを幾ら研いでもまだまだだと思っていますというような認識を示されました。ただ、私翌日の視察も含めて考えたときに、既にいろんなチャレンジをしている自治体さんから見ると、生成AIは刺身包丁というよりも万能ばさみのだと、それをいかに多方面にわたって使っていくかということで、その刺身包丁という比喻に引っかかりがあって、今朝ほども改めて読み直してみて、これ万能ばさみというのが生成AIを調理用具に例えるのであれば合うかなみたいなのはちょっと感じましたし、様々な行政分野の課題とか問題をその万能ばさみでどう切り刻んで、人員削減とか仕事の合理化を含めて利用していくかというのがやはり今直面しているところなのかなと改めて思いました。

以上です。

(山田 裕委員) 相模原市は試行錯誤の途中で、いろいろ模索をしながら進めている状況だということで、その経過が我々にとってもこれから進めていく上で参考になるかなというふうに思いました。当日、私も質問で言ったのですけれども、相模原市で進めている中で仮想市民という考え方、いろんなモデルを積み重ねていって特定できないようにはするけれども、仮想市民を位置づけて、それを市民サービスにつなげていくのだという話がありましたけれども、これはちょっと危険性と裏腹かなというふうに思ったのです。100万人、200万人とかで希釈しないと個人が特定されてしまうというような話もありましたけれども、やはり市民サービスで仮想市民をつくるというのは、かなり慎重にしないといけない危険なことになってしまうのではないかなというふうに思いました。

あと、先ほど中学生、大学生とありましたけれども、英語で質問すると大学生レベルの回答だと。ただ、日本語で質問すると中学生のレベルということで、日本語に特化するためにNECと今共同開発をやっているのだという話だったので、これは一つの方向性としてありかなというふうに思ったのと、あと最終的にどうするのかという点では、どちらも言っていましたけれども、月7,000件ある市民からの問合せ、これを自動で対応できるような、そういうシステムに最終的にはしたいのだという話しをしていましたよね。そういう形が彼らというか、我々もそうかもしれませんけれども、ごみの問

題とか、ささいな問題で結構時間取られてしまうと。それをA Iに任せて、それを丁寧に対応してもらおうということを、100%それが信用できなければ実現できないと言っていましたけれども、ただ最終的にはそういったところに持っていこうというのが一つの目標なのかなというふうに思ったところで

（鈴木正実委員長）ありがとうございます。皆さんからいろいろご意見頂戴いたしました。感想も含めてということで、非常に中身としては、私自身も感じたのは、NECという日本のメーカーと一緒に作り上げていく生成A I、これはまだまだ発展途上というよりもスタートラインに立ったところではないかなと、そんなイメージを持ってきたところでもあります。それをどういうふうに活用していくか、活用の中に皆様が考えておられるような懸念すべきところが多々あったというのは正直なところで、それも一つ一つ解消しながらやっていこうとしているのが相模原市の実態だろうというふうに思ったところでもあります。

先ほど渡辺委員、高木委員のほうから落としどころという考え方が示されましたが、最終的にはどういう形になっていくのかというのは、まだまだ今現状の中では非常に捉えどころは難しいというふうに思っているのですが、現実相模原市のDX推進課長の説明の中であった言葉が私は印象に残っていて、職員が減っていく中で先輩職員のノウハウを自分たちがどう吸収してくるか。なかなか数が少ない中で、全ての知識を持っておられない。そういったものを記憶してもらうための、簡単に聞けばそれが出てくる。先輩職員が積み上げたものをチャットGPTあるいはA Iが持ったまま受け継いでいく。そうすると、先輩職員の教えが、あるいはノウハウが伝わってくるのだ。今後職員が減っていく中では、ここを大事にしないで是不なるのではないかと。先輩職員がいっぱいいるようなものですし、簡単にすぐ聞ける先輩がいるものですから、そういったようなものにできないかということで、通常の文を作るだとか、文章の要約をするだとか云々というようなくだりが非常に私は今の在り方としては大事な一つの着地点であり、観点かなというふうに思っているところであります。人員の削減というよりも、自然減していく中でどうやっていくのだというところを前もって用意していくということが大事なのだろうという考え方を前もって持っていくことが落としどころの一つの考え方になるのかなというふうに思ったところでもあります。

とにかく聞いている話もまだまだテーブルの上であっち行ったりこっち行ったりしているような感じがありましたので、相模原市さんの取組を、浦野委員が言ったように、今後とも注視をしながら、プロンプト力をどうやって今後高めていきながら使い勝手のいいものに、日本語生成A I、日本版生成A Iをどういうふうに成長させていくかというのは、今後まだ見ていかなくてはならない、そんな段階かなという思いをさせていただいたところでもあります。その途中での危険性、いろんなところがあったように思います。これも危険性としての考え方をしっかり相模原市様のほうでも持っているということは、我々と同じところにあるのではないだろうかというふうに思ったところでもあります。その中でも最終的に大事なことという、戸籍のことでどうのこうのという話があったのですが、ここで

は最終的な手続きが必要ですよというアドバイスはやっぱり人間かなというところなんかは、私は意外と記憶に残っているところで、要は生成A Iという大きなホテルの中にいるコンシェルジュはやっぱり人間しかいないというところがこれから考えていく一つの在り方かなというふうに思ったところであります。とにかくまだまだ注視をさせていただく対象として相模原市を今後も見ていきたいと思っておりますので、皆様とまとめをするまでの間、多分半年でも随分進むのではないかと思いますので、今後とも見ていきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

続きまして、横須賀市さんのほうはより具体的な中身が多々ありました。相模原市とは違う意味で、もう実用に近い、そんな在り方を横須賀市から感じたわけではありますが、皆様のご意見を賜りたいというふうに思います。それでは、今度は反対周りで二階堂委員から。

（二階堂武文委員） 今相模原市のまとめを委員長のほうでしていただいたのですが、デジタル・ガバメント推進室長さんのお言葉の中で今の委員長と同じようなコメントを発している部分がありましたけれども、何て言うのでしょうか、電卓を使うのと変わらないと思っていますと。生成A Iは全然特別なことではないので、先ほど事例でお見せしましたようにとありまして、使わない手はないと思っています、我々も駄目なら撤退しようかと思っているので、そこは比較的軽くやっているというか、もちろんセキュリティを担保しながらですけれども、そのような思いでやっていますという文言がありました。その後に今委員長がお話しになったような形で、高い垣根で生成A Iを見ているのではなく、これだけ職員が減ってくる、でも行政課題が増えていく中でどうやったら業務効率化になるか、行政効率化の単なる助けてもらう道具の一つでしかないと捉えているので、あとは低廉な価格でいかにできるかというのが横須賀市のやり方ですと一言でおっしゃっていました。そういった中で、室長さんご自身も簡単なプログラムなら自分自身で書けますみたいなことをお話の中でちょっと言っていました、やはり画像生成A Iを表立って売っていないということで一言触れまして、それは著作権を調べてみたら、実は法律家の解釈が2つあるということで、これは深入りしないほうがいいということで、画像生成A Iは今のところはタッチしていないみたいなお話がありました。法律的なことも含めて勉強していらっしゃるなというのは感じたところです。

あと、もう一つ、やはり一番ポイントは、ここは相模原さんと私にしてみればすごく際立つ視点、視点というか、当たり前のことなのですけれども、これも丹治委員の質問に対する答弁でしたけれども、生成A Iの一番怖いところはきちんとしたところを学習させてもその答えを引っ張ってこない可能性があることだというので、人口の問題を聞いたときの間違った答えが返ってくる可能性があるという話をしました。それで、生成A Iは考えていなくて確率的に一番近い答えを出すということで、それが正解かどうかとか何かという判断は生成A I自身はやっていないから、間違いが来る可能性があるから、そこは気をつけなくてはならないという話がありました。そういった中で様々な事例を、いろいろ具体的に企業さんなんかと組んだりなんかしてやっていらっしゃると。今回の場合は、あまり構え過ぎて出口で戸惑っていても駄目なのだろうと、実際やってみて、庁内の困っている業

務分野とか何かを解決するツールとして、いろいろノウハウ的なものが横須賀市を中心とした、今19社ぐらいになるという自治体のポータルサイトでいろんなノウハウを共有したり、いろいろ情報交換しているということでしたので、本当にそういった欠点であったり、リスクなんかも踏まえながら、実務の活用分野を一つ一つ現場の要望と照らし合わせながら利用していく動きに出ているというところなのかなというのは、それをやっていらっしゃるということをすごく感動したというか、という形です。だから、政府に呼ばれたのかなみたいな少しありましたけれども。

以上です。

（菅原美智子委員）横須賀市さんは、やはり前日の相模原市と非常に対照的だなというのがまず大きな印象です。非常にスピード感を持って生成A Iを行政に導入しようとしている姿勢を伺いました。私が驚きましたのは、コロナウイルスとデジタル・ガバメント推進室が同列で走ったという、その表が説明文書の中にあるのですけれども、2020年のパンデミックが発表されてから4月1日のデジタル・ガバメント推進室が設置されたというところまで非常に短時間で行政の方々が動き出したということ、そのリーダーが説明してくださった方ですけれども、非常に早い行動力が印象的でありました。

保健所の業務が逼迫していた中で生成A Iを導入していったという先駆けがあったわけなのですけれども、それから人口減少の中で成り手不足であるとか、行政の方々の人手不足ということで、生成A Iは必須であるということも非常に印象的でした。今ほどお話がありましたけれども、新しいテクノロジーを導入するというと、周りの方々は非常に嫌だ、何それというような嫌悪を示すわけなのですけれども、そういったところにもめげずに導入に走ったというところが非常に力強いなというふうに思いました。

プロンプトにつきましても、深津式プロンプトの導入に踏み切ったということで、研修もどんどんやっているということもやはり大きな力になっているように思いました。

文章例につきましても、小学1年生でも分かりやすい文章を提示していくというのが、それが非常にマスコミのほうにも印象的だったということがありました。

1番を目指すということがありました。何が何でも1番なのですかという私も質問したのですけれども、やっぱり1番を取ることでマスコミの注目が変わってくることと、一番先を走ることが技術的にも、あるいは行政の中に浸透していく面でもやはり1番という緊張感を持って走っているのだなということも伺いました。生成A I、皆さんのお考えの中にもありますように、果たしてもっともらしいそをつく生成A Iを人間が操られるのではなくて、人間がどう操っていくのかというのが非常に大きな課題になっていくのかなというふうに感じました。

以上です。

（丹治 誠委員）横須賀市さんは、相模原市さんよりいろいろ活用事例がたくさんあって、一生懸命やられているのだなという印象はありました。ただ、相模原市さんと一緒に走りながら、まだまだ考えながらやっているのだなというのが大きな印象です。今まで話も出てきましたが、問合せボットな

んかもまだ外に出すには怖いから、行政間だけで使っているとか、相模原市のほうはごみ問題でやるみたいなこと言っていましたけれども、確かにこれ使えると非常に便利なのですが、こういうのもすごく進化するといいのかななんて思っております。福島市のホームページにA I チャットボットがありますけれども、全然使えないようでありますので、進化してもらえればすごくいいなみたいな感じで思っています。

あと、活用事例として福祉窓口にA I を置いて、キーワードになるようなものを拾い出して職員に気づきを与えとか、分かりづらいホームページを簡単にするとか、いろいろやられていてすごいなと思った次第です。

そういった中で、こういったものなので、進化が早いので、戦略アドバイザーというのを立てましたという話をされていましたがけれども、行政職員だけでは追いつかないと。これは非常にいいことだろうなと。福島市に要るのかどうか、すみません、分からないのですけれども、それが必要だろうなと思います。

あともう一つは、最新版を使うという、そこに気を遣っているとか、あとは今まで皆さん言っていましたけれども、チャットGPTは命令文が命ですって言っていましたけれども、ミニ問題をつくってどんどん職員に解かせるとか、そういった努力が素晴らしいなというふうに思いました。

いずれにしろ、一番最初に言いましたが、やりながら考えて、いい方向を見つけていっているのだろうなという印象です。委員長もさっきおっしゃっていましたけれども、まだまだ進化してくるもので、落ち着いていない分野だと思うので、引き続き調査しながらいい回答、落としどころ、さっき話ありましたけれども、見つけていければいいかな、そういうふうに思いました。

以上です。

（高木克尚委員） 菅原委員の感想と似てくるかもしれませんが、横須賀市の場合は市長の影響力というか、行動力というか、男気というか、その市長の性格とあの室長の能力とキャラクターが非常にマッチしたところで物すごいスピードで導入が進んだのかなというイメージを持ちました。何よりもあの室長の能力とキャラクターというのは、私も50年近く行政見詰めてきた一人として思うに、多分50年に1人か2人ぐらいの逸材です。ああいう能力、行動力を持った人ってなかなかいない。そんな中であの室長があそこまでできたのかなというイメージをすごく強烈に持ちました。ただ、あの室長の進めてきた中身はどんな職員でも分かりやすく、理解しやすい導入の仕方をしてきたので、非常に横須賀市は導入スピードが高まったのかな。ただ、誰でも使える、たくさんの人が使える、必ずそこに起こるのがヒューマンエラーで、これは鈴木委員長が先ほど言ったように、何か事あったときに、問題が発生したときに対応できる、委員長の言葉を借りればコンシェルジュというのですか、そういう対応能力を持った人材を必ずセットで置かないと、いざというときに困るのかなという強い印象を持ってきた視察でありました。

以上です。

(浦野洋太郎委員) 私も一言で言うと横須賀市はいい、面白い話だったなというのは感想としてはありました。先ほど委員長もおっしゃったとおり、目的というのは人口減少、横須賀市さんもだんだんと人口が減少されているということで、人口減少、職員数の減少に伴う中で行政サービスとか質の向上であったり、それを減っても保つというのが何よりも大事であって、その一つのサービスとしてチャットGPTを使っていく、生成AIを使っていくということが大事だと思うのですけれども、ロゴチャットを利用されているということで、ロゴチャットの中でチャットGPTをつないで使っているところが職員の方々が受け入れやすい一つののだろうなというふうに感じました。室長もおっしゃっていましたが、職員の方にとってチャットGPTが新たなものを使うものの一つとなると、新しいこと仕事がまた1つ増えたという印象を職員に抱かせてしまうと、それは職員も利用頻度が下がってしまったり、ちょっと後回しになってしまったりという中で、ふだん使っているロゴチャットという中でチャットGPTも使うということであれば、職員の方々も使い勝手であったり、使いやすさというのが非常にあるのだろうなというのは思ったので、この1年間という中でスピードの速さは、やっぱりロゴチャットを使っているという土壌があるというのもここまで進んだ一つのだろうなと思いました、

あとは、やはり導入の最初の段階では室長、もしくは市長の本当に頑張りとか、そういったものは素晴らしいと思うのですけれども、プラスアルファで深津さん、戦略アドバイザーの方の発信力とか、そういった力もこの1年間のスピードにはすごく加算されていることなのだろうなと。横須賀市出身の方で、私たちも知っていますが、ノートという、そういうSNSというか、そういったものもつくっていらっしゃる方で、その業界では本当に知らない方はいないと思うので、そういった方がアドバイザーとしているというのは非常に大きなことだったのだろうなというのは特異なものだろうというのは非常に感じました。

以上です。

(渡辺敏彦委員) 先ほどとあんまり変わらないのだけれども、職員をしっかり教育して、適正なデータを入力すれば、先ほど言いましたように、文書あるいは文章作りには非常に有効だと。目標という部分では、横須賀市さんからあったのは、最終的に今チャットGPTも進化しているというような話で、市民サービスにどう返還できるかというようなのもありました。それが目標であろうというふうに思うのですが、個人的な方向性としては、例えばリスクもあるのだけれども、様々な情報を入力して、そして例えば政策の検討、決定、そういったものにも活用できるようなものになっていけば、人間がいろいろ検討、決定すると損得とかいろんなことを考えるのだ。成功事例とか失敗事例というのを、全国的でも世界でもいいのだけれども、経営状態とか何かもひっくるめた中で全部入れてしまって、その中で出てきたデータ、これはデータというか、それを使えばそうそう失敗しないのではないかなというような思いがあるものだから、その辺まで進化すれば非常にこれは有効なものだと、最終決定は人間がするしかないのでしょうけれども。その辺まで早く進化すれば本当に素晴らしいものだな

ということは感じてきました。それによって、さっき言いましたように、市民サービスをどのようによくしていくか、職員の数を少なくするとか何かのレベルでない話ですものね。その辺で結局市民サービスにしっかりと結びついていかないと、市民から評価を受けないのでないかなというふうな気もするので、その辺も考えながら、これから目標、方向性について検討していければなというふうに思いました。

以上。

(山田 裕委員) 室長の話がさっき高木さんから話ありましたけれども、私はこの推進室長、これがただ者ではないというふうに思いました。とにかく実力者、あの手、この手、オープンA Iの規約まで読んで、そして活用するということでは、言いましたけれども、ちょっと圧巻の、そういう取組だなというふうに思いました。やはりそれぐらいの構え、熱意というか、それが今のああいう形をつくっているのかなというふうに思ったのです。ちょっと印象的な言葉なのですけれども、推進室長が質問に答えて、職員が減っているのだけれども、行政課題は増えていると。そのときにではどうするかというときに、これを使うということは助けてもらう道具の一つでしかないのだというこの割り切った考えです。そういう発想で取り組んでいることがああいう実績の積み重ねになってきているのかなというふうに思いました。特にやはり職員のスキルアップ、週刊紙発行したり、研修会開いたり、アドバイザー呼んで学習会したりということで、あの手、この手でA Iを活用させようというこの熱意と姿勢、やはりそういったものがないとなかなか前に進んでいくことも大変なのかなと思ったので、これをやはり福島市でどういう形で結びつけていけばいいのかなというふうに思わせられるような、そういう研修でした。

(鈴木正実委員長) ありがとうございます。様々なご意見を頂戴しました。皆さんと私も同じ感想でありまして、横須賀市は本当に実践で踏み出した足を止めない、ばたばたといいながら次々とやっていくというところは非常に聞き応えがあったかなというふうに思っています。その中で一番最初、開発の方向性ということで室長が言った市職員3,800人が今現在利用しているロゴチャットを簡単にチャットGPTに使えるようにすべきだと。これで簡単に、ロゴチャットを使うことによってチャットGPTが使えるのだというその方向性をしっかり打ち出したことが3,800人の職員の方々も非常に受け入れやすかったのだらうなというのが大きなところかなというふうに思いました。

また、先ほどお話があったとおり、その中で戦略アドバイザー、その方向づけの中で、つまりいたときにどうなるのかといったときのしっかりしたつえを、戦略アドバイザーという在り方を用意して、戦略アドバイザーのトップランナーとしての在り方、それによって先ほど菅原委員が言った1番という、そういうことをしっかりやっていく素材を常に手元に置いてあるのではないのかなという、そんな思いがありました。

チャットGPTでいろんな文書作成とかしかやってこなかった中で、もう一つあったのは仕事のアイコンとしての使い方、要するにこれをする仕事と仕事の効率が上がりますよ、ここで書いてあったのは

軽自動車申告書の年度更新とか、印刷スケジュールをチャットGPTにやらせる、こういうところが多分アイコンとして使っていく今後の在り方なのかなというふうに思ったところであります。

いろいろ消防本部などでいろんな使い方を実質やってきて、その成果も見ているというところが非常に面白い。また、職員さんたちが自ら考えて新たな使い方を考え出しているというのは、やはり室長をはじめこの推進室のほうでの取組が非常に分かりやすい取組になっているのだろうなと。これをこうやるともっと市民の人に分かってもらえますよねという発想がやっぱりその中にはあったのではないだろうかというふうに思っていたところです。

えてしてこういうものというのは学術的であったり、研究成果であったりという、私も大嫌いな方向の言葉に入っていくことが多分間違だろうというふうに思っていて、実際使っていく中でどういうふうに我々自身が考えていることが一歩前に進める、その素材になってくれたりということが生成AIを利用していく、そういったことを考えさせる素材なのだろうなというのがやっぱりありまして、先ほどの相模原市でも申し上げましたとおり、減っていく職員がいる中でしっかりした市民サービスをやっていくためのツールの一つなのだと、そういったところを今後はより具体的な活用の仕方ということを横須賀市さんでは踏み込んでいくのだろうなと思いますので、先ほどと同じ相模原市さんは日本語としての在り方、横須賀市さんは実践力あるいは利用ということでの在り方ということで、両方これからも注視をさせていただく、そんな対象かなというふうに感じたところであります。半年もたつとまたこれが進化しているのだろうなというふうに思いますので、半年間、我々もスピード感を持っていろんなデータ収集、あるいは話を今後も取りまとめていきたいというふうに思いますので、よろしく願いをいたしたいと思います。

（高木克尚委員） 1つだけみんなで共有したいのですけれども、先ほども言ったのですけれども、入力の仕方は人間、必ずヒューマンエラーというのはそこに生じるので、そのヒューマンエラーさえもきちんとチェックできるような生成AIがやっぱり目標かなというイメージがあるのですけれども、いかがですか。

（鈴木正実委員長） 今現状では、そういったところでの動かし方はやっているはずなのです。要するにプロンプトの中身によって誤りがある表現を、あるいは法律に当てはまらないものをチェックしてくれということでの生成AIを活用するという在り方は今あるというふうに私も思っていますし、それをどういうふうに分かりやすく職員の皆さんと共有していくのかというのが多分使っていく中での一つの重要なポイントになっていくというふうには思っております。

（高木克尚委員） そこは先進性ではなくて、後出しじゃんけんと言うと悪いのですけれども、後から行ったほうが有効で便利なツールが使える環境になるのかなという気がするのですけれども、他の自治体に先駆けてなんていう意識はあんまり持たないほうがいいのかなという個人的な感想なのですけれども。

（鈴木正実委員長） いや、それは持っていきましょう。コンシェルジュは自分の勉強しないのだって

よくホテルマンなんかでは言われますので、いろんなケースをどういうふうに取りまとめていくかという中で、いろんなことに発展していくのだろうなというふうに思っているところであります。ヒューマンのエラーを監視するAIの在り方みたいなものになっていくと、最終的には人間が要らなくなないようにだけいろんな観点からやっていかななくてはならないだろうなというふうに思っています。私の勝手な感想でありまして、その辺に関しましては皆様のほうではどんな意見をお持ちでしょうか。

（高木克尚委員） ぜひ、今委員長おっしゃったように、チャットと使う側との折り合いをつける提言にしていいただければと思います。

（二階堂武文委員） 今高木委員がおっしゃった件なのですが、相模原市にしても横須賀市にしてもやはり、横須賀の場合はロゴチャットをかませるところですし、プラスガイドラインとか何かという、ちょっと文書的な職員の方向けのさらに個人情報の漏えいとか何かには2段構え、3段構えということで対応されています。これは一度やはり改めて聞かなくてはならないと思いますし、私どもと行政、次長、課長も一緒に視察行っているわけですから、同時並行的にいいところは取り入れながら、走りながら進化している。福島市は、立ち話でしたけれども、最初ガイドラインをつくって、ロゴチャットを使う、実験的に使っていたのですけれども、ロゴチャットではないのですけれども、行政向けのチャットをかませるようにその後したみたいなの。

（書記） 最初はガイドラインをつくって実証事業として始めております。ロゴチャットをかませるというものは福島市ではやっていないものと思います。

（二階堂武文委員） これは戻ってきてから次長にちょっと聞いたら、相模原市のところにありました行政GAI。それとはまた違う、行政現場で利用されているものを、チャットなのかな、それをかませるやうに福島市もしたような話をお伺いしたのですが。

（鈴木正実委員長） 次長の話だとAPIというかませ、要するにチャットGPTと職員の間にある、もう一つここを通すという関門としてのAPIを通して直接チャットGPT、生成AIには入れないということが秘密の厳守であるとか、結局ここは学習をしないという機能になるので、これを通すことによって実施しているのだという話で次長から聞きましたけれども、まだそこまで踏み込んでいるのかどうかまでは分かりません。ただ、横須賀市でも相模原市でもあったのは、生成AIに直接入れない、横須賀市ではオープンAIとの契約の仕方、オプトアウト申請ということで、生成AIには学習させない、個人情報も入れない、入っても勉強しないというふうなことを初めからやっておくことによって、情報の漏えいであるとか、個人情報、そういうものはあり得ないというのが多分横須賀市の室長の話だと思っていたので、そういうところをもうちょっと我々としてもしっかりつかまえていけばどうなのかなというふうに思ったのですけれども。

（二階堂武文委員） 私も本当に福島市のやっぱりデジタル推進課としても、日々やはり進化していますので、本当にご苦労さまですけれども、委員長、副委員長、本当に意思疎通をうまくしながら、福島市のどんどん変わっていつている情報も情報共有していただきながら、できたら大きなまた変

化が出てきたときに意見を聞けるような場を、委員の皆さんとも共有できるような場を適時お考えいただいて。

(鈴木正実委員長) 今後の日程の中でいろいろ調整していきたいと思います。ありがとうございます。その他いかがでしょう。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(鈴木正実委員長) 今日いただきましたご意見につきましては、正副委員長手元で整理をさせていただいて、今後の委員会の中でお示しをしたいというふうに思っています。

行政視察の意見開陳はここまでとしたいのですが、よろしいでしょうか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(鈴木正実委員長) どうもありがとうございました。

それでは、2つ目の今後の調査の進め方についてということで、CCスケジュールのR6.2.16現在をご覧いただければというふうに思います。

中身に関して書記のほうから説明をもらいます。

(書記) それでは、CCスケジュール案R6.2.16現在でございます。今後のスケジュール、進め方ということでご説明させていただければと思います。

大きな赤枠というところで2つ、番号で言いますと9番と13番のところでございますけれども、令和6年度の当面の進め方というところがございます。まず、9番のR6、6月下旬というところがございます。当局説明というところで、6月下旬に行う形はいかがかという内容でございます。前回12月21日に当局説明ということで、現状、福島市の生成AIの進め方ということでガイドラインの策定と、また実証実験等々を行っているというところで説明を受けたところでございます。そして、先般の行政視察、そして新年度が始まったところで改めて当局の現状というものを伺いしていくというところでございます。

そして、13番でございますが、R6、10月から11月頃ということで行政視察というところがございます。今回相模原市、横須賀市というところで視察を行いましたけれども、また新たに先進地の事例ということで、生成AIの取組というところ、やはり見えていますと様々な自治体が取組というものを本当にすごいスピード感の中でいろいろとやっています。そういったところで提言に向けまして新たな先進地の事例というものを確認していくというところ、ここを大きな軸としまして、当面のスケジュールとして進めさせていただくのはいかがかというところの内容でございます。

以上でございます。

(鈴木正実委員長) 当面のスケジュールに関して、今書記のほうから説明したとおりでありまして、このように考えていきたいと思いますが、皆様のご意見を頂戴したいと思います。どうでしょうか。

【「了解しました」と呼ぶ者あり】

(書記) 行政視察、10月から11月頃としておりますけれども、こちらも視察先の受入れ状況等々を考

慮しながら、一応ここに想定しつつ、場合によっては前倒しとかも含めて調整させていただければと思います。そのときに改めてご協議、ご相談をさせていただければと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

(鈴木正実委員長) いろんなデータあるいは各市町村の取組を見させていただいている中で、やっぱり先進的かなというのは、この間も出ていました神戸市であるとか、西のほうだと。あともう一つ、最近では都城市が実は面白い取組をやっている、ですから今回は西の端、都城市からスタートして、神戸市に泊まって、そんなところまで考えてはどうだろうかまで言っているのですが、なかなか日程的に7月、8月というところちょうど夏休みの時期なので、どうかなという意識もありまして、10月末から11月にかけて、ちょっと内情申し上げてしまいましたが、そういったところで候補挙げまして、皆様にご報告、調整をお願いしたいというふうに思います。それでは、そのように進めさせていただきます。

あと、6月の当局説明に関しましては委員会において議題とさせていただきますが、当局説明の内容につきましては事前に委員の方よりもご意見をいただきたい。先ほど二階堂委員からあったような、ああいったことを今回は当局のほうにもぶつけていってはどうかということにしたいと思いますが、どうでしょう。

(高木克尚委員) 4月1日の人事異動でどうなるか分からないので、4月に入ってから打合せしたほうがいいのではないですか。

(鈴木正実委員長) かしこまりました。よろしいですか。正副委員長のほうでもいろいろ考えながら、こういったことどうだろうかということまでお示しをできればやっていきたいと思いますので、そのように進めさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(鈴木正実委員長) ありがとうございます。では、そのように進めさせていただきます。

それでは次に、その他を議題といたしたいと思います。

正副委員長からは以上のとおりでありまして、そのほか皆様からあれば。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(鈴木正実委員長) では、以上で総務常任委員会終了したいと思います。

午前11時01分 散 会

総務常任委員長

鈴 木 正 実